

メインシナリオ／サイド第2回  
『滅びを望む者たち 第2話』個別リアクション

『私には、きっとできる』

お洒落で可愛い服がいい。  
シャンティア・グティスマーレがそう言った途端、犯罪者の一人が、彼女の頬を手の甲で殴った。

どさりと、シャンティアは飛ばされて倒れた。  
頬を押えて震える彼女の襟首を、犯罪者が掴みあげる。

「あ……う……こ、殺さないで……くださ……っ」

着ていた服は奪われ、代わりに彼女に与えられたのは地味でぶかぶかな服だった。

「髪も切られたくないんだってなあ？ 坊主にしてやろうかッ！」

「あ、ああ……っ」

薄紫色の長い髪が掴みあげられる。

「ウィル、ナイフ貸せ。服、気に入らないようだから、ズタズタに斬り裂いてやる。髪も一緒にな！」

「これ以上はやめておけ。そのお嬢ちゃんを追い詰めるとこっちが殺されかねない」

「……ケツ」

犯罪者は唾棄し、シャンティアを乱暴に振り払った。

「俺達が必死に稼いできた金が、こんな奴らが贅沢をするために使われてきたんだ。世界が終ろうというのに、こんな奴らは温かな部屋でのうのうと暮らして、ちょっと悪さしただけの俺らは、見捨てられて……っ」

悔しげな彼の言葉がウィリアムにも分からなくはなかった。

水の障壁が迫っている倉庫に行き、ウィリアムは犯罪者の解放に協力をした。

そして負傷し、今は手当てを受けて床に寝転んで安静にしている。

負傷した自分を、クダンも他の犯罪者たちも、見捨てなかった。

足手まといでしかないのに、肩を貸し、背負い、ここまで連れて来てくれた。

「……あ……まり痛いことしないで……言うとおりに……しますからお願い……ぐすっ……」

震えながら、涙を浮かべてシャンティアは訴える。

「あらそれなら、裸踊りでもしてもらいましょうか」

アーリー・オサードが冷ややかな笑みをシャンティアに向けた。

「アーリー」

ウィリアムが咎めるように、アーリーを睨む。

「冗談よ。彼女にはこれから飲み水の確保を担当してもらうのだから。私達もう仲間よね、シャンティア」

有無を言わせない視線を向けられて、シャンティアは震えながら頷いた。

彼女に従っていれば、とりあえず命を奪われることはなさそうだと解っていた。

命を奪われなければ、時間を稼げれば、家や国から助けが来る可能性があると考えて、シャンティアはアーリーに従順を示していた。ただ、自分にとって普通の発言が、犯罪者を何故か怒らせてしまうことがあり、こうして時に暴力を振るわれている。

「……ここはもうヤバイ。さっさと移動するぞ」

犯罪者の男は部屋から出ていき、アーリーがウィリアムに近づいた。

「あなたの血の跡を辿って、騎士団がそろそろここに来るかもしれないわね。どうする？ 彼女とここに残る？」

「アンタさ……」

ウィリアムは上体を起こして、アーリーを見た。

「なんでこんな事やってんだ？」

ウィリアムの問いに、アーリーの眉が怪訝そうに動いた。

「無理してる様に思えてな」

水の魔法についての話や、今のやり取りも、シャンティアを助けるためのよう、ウィリアムには見えていた。

「クルーズ船の話、子供を気にしてたら」

「現実を教えてあげただけよ」

そう言うアーリーの目に、温かみは無かった。

だけれど、ウィリアムは知っている、彼女の素顔を。

町での彼女は、穏やかな顔立ちの目立たない女性だった。

今、ここにいる彼女は、化粧で冷たい印象を作り出し、露出度の高い服装で、妖艶さを無理やり作り出しているように見えた。

「気づいてるだろ？ 俺が、半端な気持ちで誘いに乗った事」

「……」

「解らねえんだ。破滅、それだけが目的に見えない。アンタの魔法も自前じゃない、何が起きようとしてるんだ？」

「自前じゃない？」

「自前なら、きっと出来るなんて言わない」  
ウィリアムの指摘に、アーリーの眼が鋭さを帯びる。  
「……やったことが、ないだけよ。それだけのことを」  
アーリーの顔に、怒りとも悲しみとも見える感情の現れをウィリアムは見た。  
「私はね、特殊能力を持った一族の末裔なの。力を隠して、港町で魔力を抑えながらひっそりと家族と共に暮らしていたわ。2年前まで。  
でも、洪水で家族は死に、生き残った母も数か月前に病気で死んだわ」  
「それで、絶望して全て滅ぼしたくなったのか？」  
「そうではないの。私はここに生きる人たち全てを憎んでいる。何故なら、私達の一族は、あなた達の先祖に滅ぼされたのだから。たった一人の生き残りが私の曾祖父。力を利用されないために、私たち家族は息をひそめて、生きてきた」  
彼女の瞳から、悲しみと僅かな揺らぎをウィリアムは感じ取った。  
「もう、終わりにしたいの。私には、きっとできる——」  
そう言うと、アーリーはシャンティアに目を向けた。  
「この男に肩を貸して、連れてきなさい」  
「は、はい……」  
シャンティアは言われた通り、ウィリアムに肩を貸して、よろよろと立ち上がる。

小屋を出て、山の中を歩き、見晴らしの良い場所へと出た。  
遠くに、魔法学校の寮が見えた。……襲撃を予定している場所だ。  
「今日は休校日。寮には子供達がいるでしょうね」  
アーリーは冷たく微笑み、深く集中をすると、手をずっと寮の方へと向けた。  
「何をやる気だ」  
ウィリアムは足を引きずり、アーリーの肩を掴んだ。  
同時に、魔法学校の寮の周りを炎の壁が覆う。  
ここからは人の姿が殆ど認識できないほどの距離がある。範囲も、倉庫や馬車と周辺を燃やした時とは比較にならないほどの広範囲だった。  
「やめろ」  
「黙って見ていなさい」  
「きゃ、ああああっ」  
ウィリアムとシャンティアの服が燃え、シャンティアが慌てて水の魔法で消火する。  
「逃げ場は、どこにもないわ。この世界のように……」  
再び、深く集中してアーリーは寮を凝視し、魔力を飛ばして寮の建物全体から、炎を発生させた。  
「くっ……あの火、消す事できるか？」  
ウィリアムがシャンティアに問う。  
シャンティアは震えながら、首を左右に振るばかりだった。  
集中が途切れれば、魔法の火だけは消えるかもしれない。  
ウィリアムがアーリーに掴みかかろうとしたその時だった。  
炎が大気に溶けるかのように、消えていった。  
「だ、誰か、います」  
シャンティアが空を指差す。助けて、というかのように。  
寮より手前。魔法学校の入口付近の上空に、男と子供の姿があった。  
男——レイザ・インダーがこちらに目を向けた途端。  
3人は炎に取り巻かれる。  
「……っ」  
何故か、アーリーがウィリアムの手をとった。  
「あ……あ……ああ……っ」  
大量の水はここにはなく、シャンティアには、為す術がなくパニックを起こす。  
『お前は、誰だ』  
炎の中から声が聞こえた気がした。  
その後、すぐに炎は消えた。不思議と、熱さは感じなかった。  
アーリーは木々の中に入ると、倒れるように座り込む。  
酷く消耗しており、放心した表情であった。  
……今なら倒せる。この娘を連れて投降し事情を離せば、罪を免れるかも……ウィリアムの脳裏にそんな考えが過るが、そんな気持ちには、なれなかった。  
「アーリー！」  
突如声が響いた。  
銀髪の華奢な少女と、公国騎士と思われる男が、近づいてくる。  
「……破滅が、自分の方から来てくれた」  
アーリーが暗い笑みを見せた。

こちらのリアクションは以下の人物に発行されています。  
シャンティア・グティスマーレ

ウィリアム